

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月廿五日印刷
昭和二十七年五月一日發行

第十八卷 第五號

浄土

五月號

老陶工を思ふ 吉田絃二郎

アメリカ二世の信仰 臼井憲成

寛雅さんの面影 中村孝也

藤田寛雅一周忌追悼

1952

5

獻辭

その来るや麒麟の疾驅する如く、その去るや龍王の昇天する如く。その生けるや旭日の熾然と燃ゆるが如く、その冥するや有明月の寂然と淡光するが如く。蓋し、人としてなすべく餘りに多くのことをなし、遂ぐべく餘りに多くのことを残こして去りし、君。

俗縁は刹那瞬間の結びにはありしが、君の残こせし萬般の事業の一つ、本誌浄土の發刊の事につらなりて、吾等のえにし今世につらならん。而も君、佛界にありて、一年のめぐりを本誌に與え、ここに老春初夏、思い出の號を出さしむ。獻するものつたなしとはいえ、願くば君、持前の巧笑のうちに、了して以つて本誌を受けられんことを。

某日、君が生前の好敵手に遭う。語りてその喧嘩相手を失いて、張り合ひなきこと甚だしきを嘆じてありたり。誠に、君の餘徳は、敵をして愛惜せしめ、味方をして痛惜せしむ。

餘徳は更に、本誌育成の上に輝き、見る如く發展を遂げ目的の漸々に兼いつゝある日、この喜びを頒つべき君の、聖魂天に昇りて一年、遺影地にその陰を益々深む。君の石の棺を覆うて定むるの日、珠玉の文章を編みてその靈前に捧ぐ。

恢運社宏譽上人確阿進道寛雅和尚 合掌

目次

老陶工を思ふ……………吉田絃二郎(30)
商賣と信仰……………橋本善吉(12)
罪ふかければとて……………眞野孝信(18)

—藤田寛雅一周忌追悼—

經かたびら……………藤田寛雅(10)
寛雅さんの面影……………中村孝也(1)
級友としての追憶……………桃裕行(5)
小學生時代の藤田君……………齋藤義彦(8)

彌勒像……………町田トシヨ(27)
えびす顔……………水野善朝(21)
開眼……………吉井千賀子(16)
みな人ごとに……………須藤隆仙(24)
涙……………早見君子(29)
よくわかる……………中野尅子(22)
アメリカ二世の信仰……………白井憲成(25)



寛雅さんの面影

中村孝也

みちのくのまのの萱原遠けども

おもかげにして見ゆとふものを（萬葉集）

月日は遠くへだたつてゆくけれど、ありし世の面影は、拂へども去らず、近々と呼びかけるのがわびしい。

寫眞がある。幾枚も、幾枚も並べて見る。

昭和八年三月の大學卒業アルバムが一ばん多彩だ。

正門の全景。すつかり葉を振ひ落したまゝの銀杏並樹の奥に、大講堂の時計臺がそびえてゐる。學生の間に市民の姿が散見する。

「先生、これは新時代の象徴です。」

寛雅さんは得意氣であつた。

「それは今思ひついたんですよ。實は偶然な取り合せなんです。」

學友たちはまぜかへした。

「何でも宜からう。銀杏の枝にふきかへす芽は諸君の生命の躍動を象徴し、その壇場は市民の間に約束されてゐるといふことにしておこうよ。」

みんな若くて元氣な卒業生諸君であつた。

文學部玄關前の寫眞がある。史料編纂所前の寫眞がある。赤門前

のがある。講堂を背景にしたのがある。池の端のもの、植物園のもの、食堂のもの、研究室のもの、就中豫餞會のものは傑作だ。よくも到る處に集合して、千態萬様の奇を盡したものだ。

この年の卒業生は二十四名。愉快で陽氣な連中であつた。そして寛雅さんは、その中でいつも一役買つてゐる人氣者であつた。

諸君はよく遊びにやつて來て放言高論した。藤田・田名網・山本三君と私と一しよに、私の應接間で撮つたものの如きは、何とも懐しい。

十九年前のものだ。その數字だけ若い私でもあつた。しづの緒だまき繰りかへし、昔を今にする道はないか。

藤田君の名はまだ宏といつてゐた。卒業論文の題目は、「平安朝の彌陀信仰、特に常行堂を中心として」といふものであつた。

「私の寺は淨土宗ですから」

と辨明してゐたが、それは先刻承知。嚴父藤田寛隨師は大學國史料を三年前卒業した先輩だ。勝願寺が關東十八檀林の一つである名刹だ位のこととさすがに知つてゐた。

「寺に關東郡代伊奈家の墓が四基あります」

と語る。近世經濟史の研究に着手してゐることを知つて、話頭を轉ずる藤田君であつた。

— 追 悼 —

爽譽上人藤田寛隨師は、實に誠實で温厚な碩徳であつた。親友桑山益二君、大野法瑞君は、その主宰してゐた淑徳高等女學校で手厚い世話を受けた。

世話をした人も、世話をされた人も、みんなこの世にゐない。私だけが残つた。さびしい。

二

大型の寫眞が二つある。一つは昭和十一年四月の撮影。新郎寛雅さんと新婦まゆりさんの結婚記念寫眞だ。

じつと見つめてゐると、不覺の涙が落ちる。まさに才子佳人の好配偶である。關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好述。詩經大雅篇に見ゆる「窈窕たる淑女」といふ言葉は、まゆりさんのために、三千年の昔に夙に用意されてゐたものである。

まゆりさんは目黒長泉院大島泰信師の愛嬢、宗界の偉人渡邊海旭師の令姪である。私は自分の人生を通して、まゆりさんにおいて、才色兼備と言ひ得る女性をはじめて發見した。それは白百合のやうに氣高く美しく香つてゐる。多角多趣、到るとして可ならざるなき寛雅さんにとりて、申し分のない天與の賢夫人であつた。

もう一つは同年同月、勝願寺庭前における集合寫眞である。四段六十人の男女の中、前段の中央に並んでゐるのは、若い和服姿の新郎寛雅さんと、白の裃袴を着流してゐる新婦まゆりさんである。寛雅君の側には私がをり、まゆりさんの側には荊妻がゐる。つまり私共夫妻が、媒妁の任に當つたのである。

佛前結婚式といふものにはじめて出會つたのであるが、壯重高雅

で、まことに立派であつた。親友大野法瑞君夫妻が介添をしてくれたので、萬端滞りなく芽出度式典を終了し、さてこそ庭前で記念撮影をしたのである。空は晴れて日はうららか、春風胎蕩たるとき、幾千代かけて祝ひ納めた慶ばしい一日であつた。お二人の前途は、春の海のやうに希望が豊かに照り輝いてをつた。

私の外側には荻原雲來師がをり、大野法瑞君がをり、藤田寛隨師がをり、藤田夫人がをり、藤田寛海君がゐる。荊妻の外側には大野夫人がをり、大島泰信師がをり、大島夫人がをり、大島泰雄君がゐる。和氣藹々、瑞光天地に滿つ。平和と幸福とは、こゝに鍾つてゐるかのやうに見える。

よい寫眞である。

それより後、春風秋雨十有九年、今はどうであるか。

荻原雲來師がゐない。藤田寛隨師がゐない。大野法瑞君がゐない。そればかりではない。嬋娟花のごときまゆりさんがゐない。渾然王のごとき寛雅さんがゐない。

何といふことだ。

仰いで天に訴ふれども天應へず、俯して地に哭すれども地黙々。雲低く垂れて風に漸瀝の聲あるのみ。人生哀愁多し。新婚夫妻の面影を見つめてゐると、またしても不覺の涙がとめどもなく流れる。

三

寛雅さんが大學を出てから亡くなるまでの短い人生行路には、相當の紆餘曲折がある。

卒業後は大學院に入つて研鑽をつゞけてゐたが、翌九年九月、鹿

兒島第二中學校長池田俊彦氏に招かれて、遙かに九州の南端に下つた。池田校長は藤田寛隨師よりも三年前に東大國史科を卒業した駿足であつて、子のやうに寛雅さんを愛してゐるので、その知己の恩に感じた寛雅さんは新婚の愛妻を伴つて鹿兒島に居住してゐたけれど、我等は若き夫妻の將來を思つて、切に校長に割愛してもらひ、昭和十三年三月、相携へて歸京の後には、大倉精神文化研究所の研究員に推し、翌十四年には明治大學法學部教授に就任してもらつた。中學校教諭より大學の學部に飛躍し得たのは異例に屬するのであつたが、寛雅さんは勇躍してその任を全くして令名を博し、私も頗る面目を施し、やがてこれを大正大學に見送つたのである。その間に眞佐子・由佳子の二愛兒を擧げた。それは前途洋々の感を覚えしめるものであつた。いづくんぞ知らむ、高明の家には鬼その門を窺ふ。太平洋戦争利あらずして、東京が敵機の爆撃に曝されるに至つた昭和二十年二月四日、まゆりさんは産後の日だちがよくなく、夫と二兒とを残して、後ろ髪をひかれる思ひをいだきながら、濫焉として白玉樓中の人となつた。「なくと見し露もありけり果敢なくて消えにし人を何にたとへん」。佳人古より多く薄命、昊天情無し恨み綿々たり。それは寛雅さんにとつては、取返しつかない運命の大破滅であつた。四谷淨運寺における葬儀の日、警報のサイレンが幾たびも鳴りわたり、敵を追撃する飛行機の爆音を耳にしながら、しめやかな讀經を聴いたときの、地の底に引き込まれるやうな寂寥の感じを忘れることが出来ない。まして強ひて疲れ切つた氣分を勵ましつゝ、諸事に執掌してゐる寛雅さんの悲痛な姿を眺めて、覺えず悵然として溜息を漏らしたのであつた。

追悼

その年の夏、軍國調の浪にもまれて、寛雅さんは、學徒を引率して北海道に赴いたが、「私は、その爲めに、倒れないで済んだのでした」と、後にしみじみ話してくれたことも、また忘れられない思ひ出の一つだ。

爾來六年三箇月の間、寛雅さんは、多くの人々から再婚を勧められたのに拘らず、斷乎として拒絶し。空閑を守り通した。そしてひたすら二人の愛兒の成育に専念した。その悲痛なる心事は、涙無くして思ふことが出来ない。

私の妻はしばしば愚痴をいつた。そして「まゆりさんのことが忘れられないのですね」と言つて涙ぐんだ。

「そうだ。まゆりさんに代り得る人はちよつとあるまいね。」と私も言つた。二人の忘れ形見は、可憐にして賢い。まゆりさんに生きうつした。白金も黄金も玉ものかは、この子たちを心をこめて養育しながら、寛雅さんは、不慮に逝つてしまつた。幼ない姉妹には、地上の父母が無くなつてしまつたのである。

四

幼い姉妹は、父と母とを失つた。亡き祖父の記憶はあるまい。しかしながら祖母浪子刀自の愛情は、豊かにあなたたちを包んでゐる。あなたたちは、今は祖母さまの爲めに、健やかに生ひたゞなければならぬ。

寛隨師に先きだゝれ、まゆりさんを失ひ、寛雅さんに逝かれた浪子刀自の心境は察するに餘りがある。常人であるならば、身心共に

— 追 悼 —

疲憊に陥つても惟しむに足らない。しかるに雪中の松柏ます／＼毅然として、あらゆる厄難を凌ぎ、大寺を維持し、愛孫を撫育する雄々しい姿は、そゞろに敬虔の情をひきおこされる。それは堅固なる信仰と、廣大なる愛情とから湧いて出る光明である。寛海さん夫妻が、老ひゆく慈母の支柱となつてゐることも亦大きな力ではあるが。

思へば寛雅さんも、寛海さんも、よい父母君から生れた幸福人である。寛容、聰明、剛毅、温情等の諸徳は、皆父母君から傳へられて、常に血管の中に流動してゐるのだ。殊に浪子刀自に對しては、私共の家族は、「鴻巣のおばさま」と稱して慕ひなつかしんでゐる。

新婚の寛雅さん夫妻を尋ねて遙々鹿兒島に行つたときには、池田校長もすつかり感激してしまつた。爾來池田さんは藤田さん一家と親交をつゞけてゐたが、去年寛雅さん急逝の後、六月七日四谷淨運寺で行はれた分骨埋葬式の時、私は近ごろ上京したといふ池田さんに久しぶりで會つて、狭い部屋で對座して時間の過ぎるのをも忘れて話しあつたのであつたが、その池田さんも今は亡き人の數に入つた。「世の中のあらしもあらざるなりゆけば、涙さへこそ色かはりけれ」。會ふは柳因、別るは絮果、「死期はついでを待たず。死は前よりも來らず、かねてうしろに迫れり。人みな死あることを知りて待つことしかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干瀉はるかなれども、磯より潮の満つるが如し」と、兼好法師が書き残した筆のあとの、しみぐと身に沁みわたるのを覺える。

「程もなく誰もかくなる身なれども、とまるはゆくを悲しとぞ見る」。會者定離、愛別離苦、宮も藥屋もおしなべて、免れがたき輪廻

の波、遅れ先だつ世の習ひとは言ひながら、逆縁の悲しみは、骨身をえぐられる思ひがする。その悲しみを堪えて、忍従の道を歩む姿こそかしこけれ。浪子刀自の御身に恙あらせたまふな。

まゆりさんの父君、母君の御身に祝福あれ。寛雅さんとまゆりさんとのみたまによろこびあれ。眞佐子さんと由佳子さんよ。すくすくと生ひそだてよ。皆さまをめぐる有縁・無縁のすべての人々に安心あれ。

「幽魂返らず黄泉邊かなり。來つて香花を捧げて悵然たること久し。」亡きお二方の寫眞を卓上に飾つて、瞑目合掌すれば、ありし世の面影が、髪髻としてたゞよふ。私は凡夫である。いくたびくり返してもあきらめがつかない。後悔をすることの多い人生にしもあるかな。

あきらめと悟りは同じ國の子が手を取りあひて秋の野をゆく
と口ずさんだことがある。

南無大悲心佛なればうつし世にさまよふ子らをあはれみたまへ

けふの日も暮れてゆく。

追悼號に寄す

吉田 絃二郎

山門の卯の花散りし頃なりき

級友としての追憶

桃 裕 行



先月二十一日我々在京の友人で、このたびの戦争で戦死した原君の七周忌法要ならびに追悼會を音羽の護國寺で行ひましたが、その

時級友の中で僧籍にある藤田君と鈴木君の二人は我々俗人と違つて、洋服の上から略袈裟をかけ、珠數を手にしてこれに列しました。

殊に藤田君には法要について始めから種々幹旋していたゞいたゞけでなく、遺族援助の勸誘に當つても、事務的能力に乏しい私共を鞭撻されて、印刷其他にも少なからぬ御迷惑をかけたものでした。當日參會した誰彼ともなく、己れの時は頼むよと冗談口がきかれたのですが、それから僅か二週間の後に、頼まれた君が眞先きに逝つてしまはうとは、その

日の參會者にとつて只夢の様であつたばかりでなく、地方在住の友人にとつてもどんなにか驚きの報せであつたでせう。

昭和五年三月東大文學部國史學科に入學以來私共の級友の交りは、數へて見れば早くも二十年に餘つて居り、今更年月の經過に驚かされる譯ですが、今その頃の事を急に思出そうとしても中々はつきりした記憶が蘇つて來ません。しかしその頃の國史學科、殊に我々のクラスは獨りよがりかも知れませんが、或意味で獨特の存在であつたといつてよいでせう。といふのは、高等學校から大學へ進むとはかに殻をかぶつた他人行儀になつて了ふ當時一般の風潮の中にあつて、入學間もなく

催したクラス會にすでに全員が顔を合せ、その後も、教室や研究室においても、又飲み食ひ語る度々の集りにおいても和氣みなぎる親愛の情に結ばれ、衣を脱ぎ腹を割つた仲間の交りとなつたのでしたが、このやうなことの原因の一半は、君は明朗豁達な性質が自らクラスの中心をなし、この様な氣分を自ら醸成したことにあつたといつてよいと思ひます。

昭和六年二年生の夏、學生の有志は黑板先生の指導の下に、京都の醍醐寺三寶院と名古屋の眞福寺寶生院とに分れて古文書典籍等の調査を行つたことがあります。君は醍醐組に加はり、私は眞福寺組に加はり、有益にして楽しい日を送りつゝ、京都と名古屋との間に盛んに寄書きを交換したことも思ひ出の一つであり、その年の冬の黑板平泉兩先生指導の下に行はれた關西地方修學旅行も亦楽しいものでしたが、それに先だつて藤田君の案内で有志で君の母校武藏高校に圓タク二臺で乗付け、君の恩師たる原田亨一教授の獨自の美術史的見地からの講話をおきゝして、修學旅行の收護を一層効果あらしめたのも君に感謝する一つの思ひ出であります。三年生の昭和七年十二月二十八日、學生々活の締くゝりたる

卒業論文を提出してホッとした我々は、又々数人で一と企てをし、翌年二月原君の郷里たる信州上田附近の史蹟を、その地の藤澤直枝氏の御案内で探り歩く、とともに、菅平に大部分の者にとつては生れて始めての下手なスキーを試みましたが、この時も勿論君はこの仲間の中心であり、上達の早かつた組であります。現在はその中の半ばが幽明境を異にしてゐることは感慨無量であります。

君の交友は可成りひろく、色々な仲間があつたらしく思はれます。昭和五年の十一月級友三人が相田先生の史料探訪の御伴をして神奈川縣津久井郡の山の中を歩いたことがありました。人の餘り來さうもない青野原といふ部落に泊つた時、宿帳に數日前に泊つた藤田君等一行の名が、君の例の達筆によつていかにも君がリーダー格らしく書かれてゐるのを見て、思はずやつてゐるなと一同顔を見合せたのも些細な一つの思ひ出であります。

君の下宿は一時本郷肴町附近の寺にゐたことがあり、又芝中學の附近の寺にもゐたやうに思ひます。肴町の下宿では、床の間に書物を埋高く積重ねて勉強してゐたのを見ましたが、しかし君はどちらかといふと、何をやつ

ても巧みであり、物に淫せず、明朗敏速に事を處理して行くといつた風でありました。特に優れてゐたのは君の文筆の才であり、たしか一年生の頃だつたと思ひますが、文藝春秋の三千字日本歴史の懸賞に應募して選外佳作となつたことがあり、またある歴史の雜誌に載つた平清盛論は恐らく我々仲間で書いたものが活字になつた最初のものだつたでせう。寺野伊三郎といふペンネームはその頃時々色々なものに見られました。しかし君の本格的に思ひを潜めた卒業論文の題目は平安時代の彌陀信仰(特に常行堂念佛を中心として)で、扱はれた内容は主として淨土宗成立以前の淨土教の發達であつたと思ひます。恐らく君の屬される宗派の歴史上の淵源を究めるのを念とされたものでありませう。

昭和八年三月丁度滿洲事變と支那事變との中間の就職難の時代に我々二十六名は卒業しましたが、一二年の間には夫々動先を見出して多くの級友は地方へちり／＼になりました。君は一年餘り大學院での研究の後、鹿兒島二中に就職され、その地に數年を過され、その間鹿兒島縣史の編纂にも關係されたと聞いてゐます。鹿兒島時代に二度、一度は結婚

の爲めと、一度は増上寺での加行の爲めに上京された時お會ひしました。その頃君の名の宏は寛雅と改められ、田名綱君と共に増上寺に面會に行つた私は、法衣姿の君を始めて見て似つかはしくなく思つたのも、君の例の餘りの潑刺たる元氣の爲めだつたでせう。

再び上京、大倉精神文化研究所明治大學東洋大學大正大學等に就職されるや、在京者との交情は回復し、殊に四谷の淨運寺に住まはれるやうになつてからは、私の家とは極く近所となつた爲め、ゆき／＼が頻繁となりました。友人の地方赴任やその頃の應召に際してはクラス會の會場として淨運寺が選ばれ、夫人の心からなる歡待にも預りました。殊にその中の最後のものは昭和二十年二月に夫人が亡くなられた後の五月私の應召の時でありました。私はすぐ歸されましたが、その月の二十五日夜、君が私の家に見えて、來合せた今一人の友人と共に語り合ひ、別れて間もなく始まつたあの大空襲に淨運寺も私の家も焼失し私は同時に妻を失ひ、その後の事どもについて君に一方ならぬ御世話になつたことは、私一個のことではありますが、これ又君に對して感謝を以て思出されることどもであります。

終戦となつて我々はこの戦争で二人の級友を失つたことを知りました。残された遺族の爲めに何とかしなければならぬといふ話が持ち上り、私は地理上の便宜の爲めに連絡役をつとめたに過ぎませんでした。二度とも煩鎖な仕事を引受けられてこれを遂行されたのが君でした。先月二十一日これで級友としての役がすんだと私に語られた君の姿が、今となつては同時に我々にとつての君の最後の姿だつたとは。

君の人格才能は各方面に重んぜられ、重寶がられ、最近殊に多忙を極めてゐた様に見受けられました。その間にあつて、東洋美術歴史教育、大正大學學報、歴史地理、佛教史研究等に時をり研究論文を發表して居られました。多忙が煩ひしたといふか、その数は決して多いとはいへませんが、沙彌生活者の精神史的意義といひ、彌陀五尊論といひ光堂考といひ、來迎藝術考といひ、瞻西上人傳といひ何れも獨自の見解を吐露されたばかりでなく君の宗教的體驗に至つては私の知る限りであります。最近發表された最後のものなどは、殊に君の人柄がにじみ出た滋味掬すべきものがある様に讀まれました。

こゝに君の論文についての一挿話をさしはさみませう。君の結婚披露式は昭和十一年四月學士會館で盛大に行はれました。當日主賓として招かれた恩師辻先生は一場の祝辭を述べられました。その中で、新郎の父君も史學の出身で、最近でも注目すべき新しい學説を發表されて學界を益せられた、新郎も亦父君の學問をついで將來斯界に活躍されるであらうといふ意味のことを云はれたのでした。あの會館大廣間に溢れるばかりの參會者は、只何氣なしに藤田君父子の前途を祝福したことを思はれますが、私にとつては別の意味でひとりひそかにほゝえまれたのでした。昭和九年六月藤田君が東洋美術に發表された光堂雜效は、かの平泉中尊寺の光堂が金色燦然と光り輝く金色堂としての名稱ではなく、一般に阿彌陀佛、即ちヒカリ佛を安置する堂を指すところの名稱から出てゐることを明かにしたものです。辻先生は東大の日本佛教史の講義において、この説を紹介され、これは昨年國史を卒業した藤田宏君のお父さんの藤田寛隨といふ人の説だと云はれたことを、この講義を受けた人から私は直接きいてゐたのです。藤田君が宏を寛雅と改名したことを御存

知なかつた爲めに、似た名前の父君ととり違へられたのでせうが、一つには君の老成の筆が父君の論文としても相應しかつた爲めでもあつたのでせう。おやまだ御氣付きでなかつたのかと、先生の祝辭をきゝながら私がひとりほゝえまれたのはかういふ譯だつたのです。藤田君は光堂の説によつて、親の光ならぬ子の光によつて、たまゝ父君を顯揚するといふ結果になつたのであります。藤田君のこの説は、今なほ鑿鑿たる辻先生が刊行し續けて居られる不朽の名著日本佛教史の中に、今では正しく紹介されて、先生も既に先の誤りをお氣付きになつてゐる筈であり、又先生の御紹介によつて、この君の説は既に學界の定説とまでなつてゐることは、誠に喜ばしいことと存じます。

君のこれらの珠玉の諸篇は、若し一本に纏めて上梓されるならば、學界に寄與するところ多かるべきは明かでありますが、現今の出版事情の下では、只私共の非力を歎ずるのみであります。今にも私は、史料編纂所の一室に座つてゐると、サツと元氣に扉を排して君の姿があらはれる様な氣がしてなりません。

(筆者は史料編纂所員)

小 學 生 時 代 の

藤 田 君

齋 藤 義 彦

眉目秀麗な利潑相な顔貌で、丁度群雞の一鶴と云つた感じがしました。

轉校當初は融け合えない淋しさがあつたやうでしたが、やがて學業でも運動でも或ひは交友態度でも、自然と級中の推服する處となつて、中心人物になつて行つたのでした。特に學業は優れ、授業中の質疑應答などもテキパキとして、その態度を常に見習へと他の子供たちに云ひ聞かせたものでした。

また作業なども嫌がらずやつて、教室・廊下の掃除も空糲布までかけさせ、全校第一位にきれいにして賞められた事もあります。寒中の掃除の時など甲斐甲斐しく働いた姿が眼に浮びます。

たゞ頭のよい子供であつたゞけでなく、素直な實行力の強い意志の子供でした。悪戯盛りの頃でしたが、他の惡童に見る腕白さはなく、私の留守など級中で騒ぐと鎮め役をしてくれ、他の級友も亦よく云ふことをきくと云つた風で、夙に大人となるの風が仄見えてゐました。

またこんな話が憶ひ起されます。

或る夏休みの宿題の中に「七夕とお盆」の民間行事の由來を調べて來なさいと命じたが

九月新學期始めに宿題を持つて來たところが殆んど全部の子供たちは、書いてありませんでした。

田舎の子供にとつて季節的に年中行事中でも特に印象深い行事ではあるが親兄弟からも教へて貰へず手引の本も家庭にはなし中には中學女學校に行つてゐる兄姉からきいたといつていゝ加減なことを書いて來たのが一人二人いた位。

その時藤田君が手を舉げて「メモ」のようなものを片手に滔々と解説されたのには吃驚もし君が物に當つて徹底的に究明しようとする他日の學究的性格は既にこの時にも仄見えていたわけでした。そして後で何かの時藤田君が「先生あの問題を僕等に出したのは少し無理ではないですか家でお母さんも言つてました」といわれ若い無定見な教師の無茶な課題提出に痛い忠言を頂戴してひどく恐縮自戒したことがある。こんな處にも師の命をうけてやるべきことは全力を盡してやり言ふべきは顔を犯してもいふという實にキチンとした將來を囑望させるに過る立派な少年でした。

大正十一年春私は鴻巣小學校を退職して東京高師の臨教に入學のため出京學卒つて愛知

今でもはつきりと覚えて居ます。

それは私が師範を卒業して三年目の大正九年、第二學期最初の日でした。

御一家が大阪から來住されたので、轉入學のため御母堂と一緒ににお目にかゝつたのが最初でした。それ以後卒業まで、ずっと私が擔當しました。

田舎つ子に見る頑丈な體格ではなかつたが

縣の女學校に奉職二年居て東京高師研究科に入學の爲め再び出京その際御尊父に内職先の御世話をして頂いてお蔭で二年間學資に困らず業を卒へられたことは終生の御恩と感銘いたしてをります。

其後出京明大大正大学教授と榮進されて行つたお話を時たまお宅を訪ねた折や御母堂からのお便りでお聴きして後世畏るべしと絶大な敬意と祝意を表してゐたのでした。時に歴史學關係の學究雜誌を手にとつた折に藤田君の論文が載つているのを見て懐しくもありお成人なされたお姿を思ひ浮べて心秘かにお慶び申上げていたのもありました。

其後私が上京二轉して昭和十九年末東京都教育局に奉職し終戦後敎職審査の仕事を担当していた時要務で來應され久しぶりにお目に懸つて學生よりの信望を蒐め徳は到つて名利の後督を繼ぎ愈宗門に重きをなしてゐる圓熟大成された君の風采に感嘆せずには居られなかつたのでした。

其の後一二回來應されたまゝ途絶えていたが、昨年春に尊父の墓參をさせて頂きたくお宅を訪ねた折山門を飛石傳ひに庫裡の方へ近

づいて來られる和服姿が壯年時代の御尊父様そつくりなので御母堂としばしあれこれおん物語致したことでありました。

それから十日程經つたかたゝぬにあの御不慮の御逝去となられたのであつて泌々無常を知つたのでした。

先年お二人のお子さまを置かれて賢夫人に先立たられたお話でお痛はしく存じ上げていたのですがそれでも流石は名利の大徳となられただけに實にすつかり悟りを開かれていなさるようにお見受申された。

私は藤田君より十二三年上で、あと四五年も經てば年順にも達しますが此の世に爲して來た何事もなく徒らに愚齡を加へたのみで全く文字通り「人生五十愧無功」というところですが、藤田君は方にこれからという年配で爲すべき仕事を多く持ちながら私達から申せば君にして大いにやつて頂きたい仕事も澤山あつたのに忽焉として御他界なされ今や幽冥境を異にして呼べども應へてももらへないとは返すくゝも哀悼の極みであります。

(筆者は東京都總務局學務課審査係長)

「櫻果會句草」より

ふじた かんが

梅咲くやたまさか風の光り過ぐ

書架の塵白く透きをり朝東風す

佗び住めば藤はみじかき花つけぬ

午睡さめてわびしや風の吹き荒るる

青桐に風ある夜の留守居かな

幌蚊帳を透きて寢息のすこやかに

雨や祈る聲々空に灼けのぼる

瀧しぶき山嶺とほき日の在り處

噴きあげの音して暗き繁みかな

百日紅花こまこまと日向雨



遺稿 經かたびら

藤田 寛 雅

「經かたびら」が何時のところ、どのやうな因由から始まつたかは、餘り氣にとめる人もなく、従つて特に定説もないやうである。

然し、「死」の装束として其れは今も尙ほひろく行はれてゐる。望月博士編の佛教大辭典を見ると、「何れの時代より起りしやは詳ならざれども、良定の泥洹之道に、中比紀伊の國に始まると云へり。恐らくは鎌倉の末頃より足利時代に至る間に、眞言家の人によりて始められ、後餘宗に及べるものならん」とあるが、大體この程度の考へ方が通説としてよいであらう。

然し私は、讀史の餘暇に書きとめたノートから、一つの別の考へ方を出してみたい。

三外往生記の「經源」に關する項をみると、彼はその臨終に當つて「梵字を以て往生要文を書」とした紙淨衣を着して往生をとげてゐる。その示寂は永久（一七七三—一七七八）とあるから、既に平安後期の頃にはこうした「死」への用意が行はれて居たことは疑ひない。

大體、當時の往生傳類をはじめ、諸記録の往生相を記したものをみても、臨終時の装束は此れに類してゐるものが多いが、これは竟り「經かたびら」に他ならない。

本朝新修往生傳が記しとめてゐる「沙門永尋」は「諸經要文眞言等を書」いた袈裟を、命終のときに着用してゐる。彼は大治四年（一一二九）に寂してゐる。

此れらはいづれも「經かたびら」といふ言葉ではないが、明らかに其の始源に直接するものであることは推察されるであらう。

然し或ひは、此れらの示例が當時の記録に多く求めえても、それは僧門の徒であるから、と言ふかもしれない。だが往生の思念の昂まつてゐた當時に於て、かうした臨終用意の在り方は、次第に一般化して行つたと思はれるし、それも左程の長い年月を要したとも思はれない。

平安時代の末、保元元年（一一五六）鳥羽法皇の崩御、御入館に當つては、玉體を掩ふに「梵字を書」した白練絹の野草衣を以てした。また九條兼實の息良通が死去し

たとき、亡骸を掩ふ衣に梵字を書いたのは、佛殿上人であつたことが玉葉に見へてゐる。

此れらは、いま世俗にいふ「經かたびら」と何ら異なるものではない。

「經かたびら」の始源は、もともと臨終用意の在り方の一つであつて、「生」から「死」への、その心構へとしてとられたものが、次いでは死者そのものに對するものとなつていつたのである。そして、このやうな「死」に對する用意は、當然「死」への省察の深まりにたつものであつて、その點からすれば、此れはまた少くとも平安中期にまで遡ることができる。

梵字を記す形式が多いことから「眞言家に始まつて餘宗に及んだ」と推測するよりは、梵字にせよ、漢字にせよ、記されるものは往生要文に關するものが多いのであり、むしろこれは惠心を中心點として發展した「淨土教」者の間に、その始源を求めるべきである。

當時の往生人たちの心ふかき「死」の用意、その淨き往生への思念が「經かたびら」と後に呼ばれる「死」の習俗を普遍ならしめる源をなしたのである。

「經かたびら」といふ言葉そのものに執して言へば、或ひは此の言葉の現れるのは更に遅れた時代になるかもしれない。

追悼

然し以上のことを辭典の解説風にいへば、これは恐らくは「平安の中頃から往生信仰の發展に伴つて、淨土教者によつて始められ、次第に一般に普及して現在の如き習俗をなしたものであらう」とでも記すのが、まず妥當なのではあるまいか。(一九五一・五・一夜)

略歴

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 昭和三年四月 | 埼玉縣立熊谷中學校第四學年修了
武藏高等學校文科甲類入學 |
| 〃 六年四月 | 東京帝國大學文學部國史學科入學 |
| 〃 九年三月 | 右卒業、同大學大学院入學 |
| 〃 九年九月 | 鹿兒島縣立第二中學校ニ奉職 |
| 〃 十一年四月 | 鹿兒島縣史編纂委員 |
| 〃 十三年三月 | 大倉精神文化研究所研究員 |
| 〃 十四年四月 | 大正大學ニ奉職・明治大學講師 |
| 〃 十五年四月 | 東洋大學ニ出講 |
| 〃 十九年四月 | 大正大學訓育主事ヲ兼任 |
| 〃 二十二年十月 | 埼玉縣鴻巣町選舉管理委員長 |
| 〃 二十三年四月 | 大正高等學校主事ヲ兼任 |
| 〃 二十五年十月 | 埼玉縣文化財保護委員 |
| 〃 二十六年五月四日 | 西化 |



商賣と信仰

橋 本 善 吉

一 信仰で把んだチャンス

わたくしどもの店が、東京で皆様から指折ゆびさげの天ぷら店に数えて頂くまでには少なからぬ苦心を重ねてきました。現在の當主は三代、私は二代です。

初代善吉は、埼玉縣大里郡明戸村江原の出身で、家は代々貧乏な百姓でした。幼少より成田の不動様を信仰しておりました。子供ながらも、このまゝ田舎で凡々と暮すより、何とかして江戸へ出て一旗擧ひしほげたいと志を立て、とうとう十三才の時に、成田にお参りに行くだというて、家を出ました。着のみ着のまゝで持物として、懐ふところには僅か天保銭が一つ二つという有様。しかし、心は勇んで足ど

りも軽くやつてまいりますと、村から四、五里ばかりの所で、一人の乞食坊主に會つたのです。見れば、かねてから信仰している成田山の頭陀袋を下げた人。どこまでいくと問うから、成田へ行くのだという、それなら連れて行つてやるからついてこいという。そこでその乞食僧について一緒に行つたわけですが、熊谷まで来ると、その人は、俺はここで歸るといつて、さつさと姿を消してしまつた。

初代善吉は、今まで道連れがあつて心強かつたのが、急に一人になつたので淋しくなりはしたものの、考えたのです。あんなふうに、すげなく途中で分れ去つて行つたあの僧形は實は不動様の化身だつたのではないか知ら。

そして不動様が私をここまで導いてくれ、江戸でしつかりやるがいゝと勵ましてくれたのだ——と。

こう考えると再び、勇氣が湧き起つて來た。そこで方向をかえて、今度は江戸へむかつて旅を續けると、ふしぎな事には、どこの茶店で一服しても茶代をとらぬ、戸田の渡でも櫛くし錢をとらない。これは、きつと、いとけない自分を不動様が守つて下さるのだと感じつゝ、無事に、憧れの江戸に足を印したのでした。當時、江戸は王政復古の眞最中で、町は上を下への大騒ぎ、なか／＼おいそれと職もなく、何者とも知れぬ侍さむらい共に荷物持ちやら走使ひにこきつかわれ少々ばかりの駄賃を得て暮していましたが、こんなことばかりしては

何もならぬと思いかえして、ひまをみて江戸を脱け出して、一まず成田さんへお参りすることにしました。

途中、あち、こちと親切な家で呼びこまれて、うどんを御馳走になつたり泊つたりしましたが、翌朝になつて通行の人に聞くと、そんな所に家なんかあるはずはない。狐にでも騙されたのだらうなどと云われたが、ふしぎに、いろ／＼な人に助けられた。こんなふうにして、とに角成田山へ行き御札を買つたのを田舎の家にほりこむように置いて、わらじも脱かずにその足で再び東京に引返した。初代善吉は俺を東京へ呼んでくれたのは不動様なのだと思つて一心になつて働き始めました。

二 井一つのそば屋

東京で何をやるうかと思案したが、初代の親爺が三文商賣ながら、いか、さつまいもなどの揚物をやつていたので、天ぶらをやるうと思つたのです。

だが店を構えるまでには、いろ／＼のことをやつてみたのでした。まづ第一に、そば屋へ奉公したのですが、寝る時でも、きちんと着物を疊むという律儀さと眞面目さが認めら

れて、いつしか、武州の若旦那というニツクネームがつく程でした。こういうふうな實直さが買われて、後々には落目の家の整理復興をたのまれ、主家の没落を救つたりした。

しかしまあ最初から、そう樂に思いが遂げられるわけではなく、横濱へ奉公がへをしたり、品川の臺場の土運びをしたり、車引をしたりしたのです。或時、四谷見附で客をのせた所、吉原へ行けというわけで提桶を上げて走り出したが客は車の上から早く走れ早く走れと怒鳴ります。一生懸命かけてはみたが、とう／＼日本橋でへたばつてしまつたので、

他の車にのりかえて貰つて、へとへとになつて家に歸つてふとみると、提燈の中に五十錢銀貨が一つ入つていた。五十錢といえば當時大した金なので、びつくりして、これはこのまま貰うわけには行かぬと、翌日から毎日四谷見附に一週間立つて、先日の人を探したりした事もあつた。

そうこうするうち、やつと、芝大門のそばやに落着くことが出来た。奉公しながらも初代善吉は、ものを大切にする人で、余つたそばなどを、温めては當時増上寺の山門などに屯していた乞食に恵んでやつたもので、乞食

は、只じやすまぬと一文二文持つて來た。斷つても、もつて來る、乞食から金を貰つたのは俺くらいなものだとよく笑つて私共に語つてくれました。

その眞向うに紀國屋という店があつた。この主人が初代を見込んで、銀座へ露天ながらそばやの店を開業させてくれた。其時の仲間には、新橋の青柳、京橋の明月堂でして、青柳はまんじゅう、明月堂はしるこ、初代はそばを賣つたのでした。雨の日は、賣上がなく、高利貸に金を借りては商賣しましたが、仲々うまくゆきません。そんなわけで一時店をたゝんで裏店に引込んだが、しばらくして、今度は新橋で——今の新橋郵便局あたり——青夫井のそばやを開いたのです。當時、汽車は新橋から出ておりました、俵引など澤山集つていたが、そういう大衆相手にやつた。何しろ、始めは、井一つというのだから、次のお客さんは、前の人が済むまで待つていといふ有様でした。

そうするうちに、今の店の所にたばこ屋があつて、その土地が賣りに出た。そこで、表通りに出ようと思つて交渉を始めると、知人が忠告して、鬼門の方向に當るから止めたが

いいとのことだつたが、鬼門こそ望むところと逆に云つて、現在の場所に移つたのです。

さて、愈、緊纏一番、奮斗をつゞけました。

又、成田山で一週間の断食をして所信を更に固め、そして、十年間お粥でがんばると誓いをたてました。おかげで、三年位すると雇人もできるようなつたが、今度はこの連中がお粥では腹がへつてたまらぬとぶつ／＼いうので、ふつうの食事にしましたが、初代本人だけは十年間とうとうお粥で押し通した。

二 金を積むより徳を積み

天ぶらを始めるようになってから、運がむいて、ひたむきにやりましたが、決して利益本位ではありませんでした。

まず大衆本位に、薄利を主義とするという方向のものです。お金は死んでから持つていけるものではない、所が、人は死んでも徳は残る。そういう不滅のものを目當にせねば駄目だ。初代はよく、そう云つたものです。

お客が、飲んだり喰つたりして、あまりお代りすると、そんなに勿體ない事をするものでないと注意して、お客から財布を投げつけられた事さえあります。當時大枚の一圓、五

十銭を出すと、そんな大金を持つてやつて来てはいけないうと、おこつたものです。おつりは、紙幣のしわを、一々丁寧にのばして揃えて渡しました。

そういうわけで、お店も次第に繁昌して参りまして、あまりお客が来すぎるので、番號札を渡して順番が公平であるように工風したり、木戸を閉めたりすることもしば／＼でした。

四 不斷の信心

出發點が先に述べました通りですから、不動様の講中をつくり、盛永講と名づけ、講員は三百人位でした。かけ金が少くて、たりぬ分を全部初代が自腹を切つていたので参詣講員もふえるばかりです。何かにつけて参詣寄進して、自分の信心と家運繁榮を祈りました。

私が日露戦争に征つた時には、初代もおれも行くといつて、満州に渡り、戦場を廻り、南無阿彌陀佛を稱えて敵味方なく靈を弔うて來ました。

どうやら商賣も軌道に乗り、自分の念願も適つたので、御禮参りをはじめました。一ヶ

月程の豫定で店の者や親戚の者をつれて全國の聖地を巡拜、其際、金の塊りを携帶して一々お供えをし、お下げを持ち歸り、これで不動尊、皇太神、弘法大師三體一組の金のお守りを三百組こさえて、家族親類、縁者に家寶としてわけ渡しました。

私共の菩提寺である目黒の隆崇院にも、明治の移轉には、家業をさておき一骨を折りました。大正の震災には、家も全焼しましたが先ず、佛様の事から、お寺からとて、門と本堂を一寄進で復興しました。當時のお金で五千七百圓程でしたでしょうか。それから親戚の家など建て、結局自分の家はこの年の十二月になつて始めて建てたような次第です。こういった信心と律儀と努力で、初代は、東京三福の一として押しも押されぬ天ぶらの橋善を築き、昭和五年十二月八十八歳の高齡で亡くなりました。

五 ひとに負ける、我にかへ

私が橋本家に來たのは二十歳位でしたが、當時橋善はもう立派に名の通つた店で、奉公人も五、六人いました。

この初代の下で、何かと厳しくこまれた



のです。築地の魚河岸へ仕入れにいくのも、多の寒天ですら、素わらじで行かせられた。魚河岸も今とちがつて目方賣りでなく皿なり容器に盛上げてあるのを買うのです。上の方にはよいものが、のせてあつたりしてなれぬものにはとても難かしいものでした。

もともとえびは直接産地である九州の有明海へ行つて取引しました。畜養といつて、飼う奴です。御承知のように、えびは十二月末から多眠します。これが、コンクリートのわくの中の盛土にもぐりこんでいる、それをとつて使うわけです。その場で頭をもぎとつて氷詰めにして、どんどんこちらへ送らせるの

です。ですからこちらについても生き／＼しております。それを揚げるわけです。何とかして、生きのよい、旨まいのを客に出したいという努力でしたが、直接取引だつたので魚河岸からはボイコットをくうた事もありました。そのえびが當時二圓五十銭から五圓、今では一萬五千圓ですから、今昔の感にたえません。

とにかく、やゝともすると、楽な方法で其日々々を暮らしがちな我儘な自分の心に打勝つて自分の志をのばして行きたい。初代の名をはづかしめず、家業を守る。しかも、人と争うを事とせず、やつてきました。組合長だのその他土地の色々の役を押しつけられたのも、そういう私の平凡ではありますが信條によつてやつてきたせいではないかと思ひます。

五 天ぶらヨーロッパ

ツバへ

翁 吉 善 本 橋 代 二

昭和四、五年には、當主定善橋が、てんぶらを揚げに、アメリカ、ヨーロッパと廻りました。先日の新聞には、アメリカへまゐりての秘傳を教へて行く人の話が出ておりましたが、天ぶ

らも歐米にない味の一つでしょう。今日では外人がよく店に来て食べて行きます。當時高松宮が、あちらに居られマドリッドに滞在中で、橋善を呼べといわれ、飛行機で行つて揚げた事もある。ナフキンがないので、橋善のマーク入りの手拭を出したら、異境の事として大そう喜ばれ、おいこりや橋善の廣告かと冗談を言われた由。

とにかく話は別としまして、天ぶらの洋行は愉快でした。質素な暮しでやり抜いた私共の創業のころからしますと全く夢のような気がしました。私共の結婚式でも御馳走はそば着物は半纏というやり方、いやなら歸れというのです。このような地味な、しかも堅實な努力が、反つて、こうさせたのであると考えます。終戦後のパチンコ式商法を見ると寒心にたえません。物には影があるように、華やかな商賣にも、目に見えぬ努力がその蔭にあるのに、氣のつく人は少いようです。

私はもう八十で、菩提寺の裏に隠居所を建てて感恩の中に日々を送らせてもらつておりますが、時には杖をひいて新橋に出かけ、當主や若い者の間に入つて、揚げ場に立つて手傳をするのを唯一のたのしみとしております

開 眼

——農村に住みて——

吉井千賀子

村には、醫者がいなかつた。暑い午後の日ざしの中を、ぐつたりと重い病児を抱えて、二里半も離れたM町に來て醫者に診せた。醫者は、不器用な手つきで、一時間ほどもかかつて病児を診察した。病狀がはつきりと出ていないので、診斷は、むつかしいというのだ。たゞ、何となく遊び方が、何時ものようでないという感じだけで、引き抱えて、病院に來てしまつたのだが、此處へ來るまでの間に、刻々に生氣を失つて行く病児の様子で、その身體の圓いが、私にはまるで目に見えるように判るのだ。東京に居たら——私は、醫者の態度がもどかしく、そんなかえらぬことを何度も考えていた。とう

／＼原因は、判らずじまい。下痢でもかけたらというので、素人にも判るヒマシ油を少量與えられただけで、また、二里半の道を家へ歸りついた頃には、子供は、すっかり病人になつていて、起き上がる力さえなかつた。私は、もお、おろおろと、ヒマシ油を與えて頭を冷して——子供の父が、務めから歸つて來た頃は、熱も三十九度を越えていた。が、夜になると、もう、どうすることも出来ないのだ。氷も、醫者も、二里半離れたM町まで行かなければならぬのだから——。永劫に續くように思えた夜が、ようやく白むころ、一里程先の驛に出て、一番の汽車を待つて、M町に再び病児を運び、今度は、違つた醫者の門をたたいて、轉がり込んだ。

「こんな重病人をよくも此處まで連れて來たものだ。途中で、まいつてしまわなかつたのが、幸だ。」

醫者は、診察の後、あきれてこう言つた。

「とにかく、運は、天にまかせること。最善を盡してみましよう。」
今度の醫者は、一人つ子の運命を托するのにな、十分信用のおける人柄のように思えた。

注射をうつた。子供は、何の苦痛も訴えない。今度は、洗腸した。子供は、少しあばれた。

「大丈夫かも知れませんか。いや、きつと、大丈夫ですよ。案外、強い子だから——。」

朝日のよくあたる暑そうな二階の病室に移された子供の青ざめた顔の中に、強くひらめくものを感じて、私は、子供の父にさういつた。

二、三日たつて、子供もやゝ少康を得ていた。と、村の代表が、はるばると病院を尋ねて来てくれたのだ。物々しい様子なので、父は、先づ面喰つて、扇風器のまわつてゐる病院の應接間に、一同を通した。色あせたあぢさいの花の活かつてゐる花瓶をはさんで、向い合つた。その中の一人が、やおら立ち上ると、

「この度は、坊ちやんが、とんだ事で、皆にかわりまして……。」

出された包みに「御霊前」と、はつきり書き込まれてゐたのだ。父は、しおれたあぢさいの花を何時までも見つめていた。

その坊やも今年は、十七歳、背丈、五尺七寸、十九貫の巨大な體軀を持つてゐる。今は、時折の笑い話の種になつてゐるのだが、その頃、村では、病院に入つたり、醫者を呼んだりする事は、死の前ぶれと決つてゐたらしい。村では、入院して、生きて歸つて來たものは、未だかつてなかつたのである。それほど、救いがたい病狀になつてから、醫者にかゝるのが常だつたらしい、だれから出た噂さか、子供が死んだ事になつて、病院から、すぐ、郷里にでも行く事になつては、というので、義理がたい村の人達の取り計いが、この場の仕儀となつたわけらしい。

坊やがよくなつて、村に歸えり、お床あげの配りものとした時、村の人々の心持には、何か割り切れぬものがあつたらしい。その後一年位、坊やの健康は、思わしくなく、絶え間なく、風邪を引いたといつては、病院に行き、熱を出しては、醫者を呼んだ。村の人達は、「病院通いも、道樂の一つだんべ。」と、かげ口をたたいていたが、若い嫁たちは、何か考えさせられるものがあつたようだ。

「おかみさん、せがれが夜泣きして困るで、病院さ行くんだが、どの位かかるべいか。」

と、そつと、私にききに來る嫁御もあつた。

「ばあ(姑)にないしよで、子供を醫者どんさつれて行くで、ぜにを少々かして下さらんか。」

と、金を借りに來る人達も出來て來た。私は、その人達のために、喜んで、お世話をした。紹介した醫の藥代を払わされた事もあつたし、貸した金が、歸えらないことも度々あつたが、私は、こうした村人の間に、將來への期待から、明るいほんとうのものを感じ出してゐた。「一日早く醫者どんに見せれば、その病氣は、十日早くなおる。」と、私は、折にふれて、村の女達に説ききかせた。

ある時、私は、知り合いの老婆を通じ、病後を養つてゐる少女に、卵を五つ届ける事をたのんだ。その翌日、早速、老婆は、その少女が、涙を流さんばかりに喜んだと傳えてその後でつけ加えた。「ねえ、おかみさん、あの娘つこは、折角のあの卵を賣つて、赤い下駄の鼻緒を買つたんだよ。肺病つたかりのくせに——。」

一度は、私も、卵を賣つて、その金で、赤い鼻緒を買つたと、老婆のいう通り信じたが、後で、卵は、少女の手に渡らずに處分されたと知つて、恐ろしい氣がした。私は、しようりもなく再びその老婆の手を経て、娘に卵を届けさせた。今度は、老婆は、その卵の行方については、語らなかつたが——だのに、私には、その卵の行方が、はつきりと判るような氣がした。

罪ふかければとて



眞野孝信

私は香筒より一本の線香をとり出して立てた。對座した女性は、垂れていた頭を擡げて露を浮べた眼指を私に向け、羞恥に似た笑みをたゞえながら、靜かに口を開いた。

「さぞお疲れの事だらうとは存じましたが私の話を是非聞いていたゞき度く存じまして寄せていたゞきました。暫くお聞きとりいただけませうか。」

若き身につゝんだ悩み？だがしかし、たゞかひぬかうとする眞劍さ、いや、何かをものにし得たと思はれるやうな、落着きを感じさせられる。

「どうぞ、お心おきなくお聞かせ下さい。」

旅さきでの私、他用ございせんから……」と答へると、「では話させていたゞきます。

實は、私、今日の最後のお席で、『罪ふかければとて卑下し給ふべからず……云々』との元祖さまのみ教、『治承四年平清盛の命により、奈良の東大寺を灰燼に歸せしめ、世に佛法破滅の大賊とまで言はれた重衡へのこの御法語を、私へのお詞——私へのお詞といたゞいて——』との御説示に、私はみひかりを拜ませせていたゞきました。私の依るべきはお念佛——矢張りお念佛だつたと會得させていたゞきました。迷へる私は、今やつと正道に立つ事ができました。だつて私は、念佛の聲す

る處をこそ、私の住處としなければならなかつたのですの——。」

と、何かを追想するが如く、膝の上に重ねた白い手をさするのでした。

「でも、詳しく申し上げなければ解らないのですが——、私は只今三十二歳でございますが、早くから両親に別れて尼僧さまに育てられました。とても優しい方で、全く悲母觀音のように想へてなりません、——私は肉親も及ばぬ程に可愛がつて育てゝいたゞき、女子師範を出していたゞきました。そして、漸く教壇に立ち始めた頃から胸を思つたのでございしますが、その時も、何一つ、小言すら言はずに、看病して下さいました。お陰さまで、今では全快して復職致して居りますが、——その方が亡くなられる時に、『一寸起してほしい。』とおつしやつて、抱きかゝえた私の膝の上で、『あゝ！有難いことよ、み佛さまのお迎へをうけて、お淨土參りをさせていたゞける。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。お念佛唱へながら一步步々お淨土へ旅立たせてもらうでね、貴女もお念佛して送つてよ。だんだん遠くへ隔たれば、耳には聞こえぬようにな

るじやろがね、しつかり念佛しておくれ、西方十萬億の佛土を過ぎた極樂へ到つても、私は念佛申すでな。行住坐臥不問時節久近念念不捨のお念佛だよ。わしを想へば念佛が第一よ。お念佛だけが彼此の二世を貫くじやからなあ、南無阿彌陀佛。」とおつしやつて、『さあ、床に就かせてもらおう。いろ／＼とお世話になりました。ありがとう。ありがとう。』

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、——唱へ合ふ中に、旅路を隔てゝ、遙か彼方にきえ入るやうに往生を遂げられました。「一擧に語りつゝけた聲には、亡き法尼の魂がのりうつゝたやうに、若い女性の述懐とは思へぬ眞實と、絶對歸依の熱情が溢れていた。

數珠を爪繰りながら聴き入つた私は、「結構な往生でございましたね、今も法尼は屹度お念佛を御相續しておいでよ。貴方は幸福な方ですね、全く悲母觀音のお育てを受けられたわけですねえ。」と、法尼の往生を讃歎し女性の果報を同慶すると、追想から醒めたやうに、「でも、み佛さまは決して私達を嬌へさせては下さいませんわねえ。強く生きねばならん、苦の世界を生きぬくのだ！」と心構へ

つゝも、つい愚痴をこぼし、不平不満から脱けきれなくつて！」「そうです。私達は五濁の中の罪人なればこそ、念佛して報土に往生させていたゞくのです。私達の爲にこそ、元祖は淨土宗をお立て下されたのです。」「では私が——私が何もかも悪かつたのです。いたらなかつたのですねえ、——やつぱりそうでございました。」と信機徹して道を得た歡喜は期せずして彼女を合掌の姿に導いた。

「全くお恥しい事でございますが、私は先程來お話させていたゞきましたおじゆつさまの御在世中に、今の主人と結婚致しました。

主人はキリスト教徒でございます——全く熱烈な信仰をもつて居ります。信仰のあまり、時には『夫婦が同じ宗教の信仰をもち、同じ信條のもとに生活できたら、どんなに幸福だらう！』つて申します。そして『お前も日曜日には私と一緒に教會にゆかないか』つて誘つてくれるのですが——私はその度に信仰と夫婦の間柄と言ふ事について悩みます。私は何かしら異教徒なるを以ての故に、相反目せねばならぬものを感じまして、主人の言葉や行爲にすら疑惑を抱くようになりました。つ

い最近のことですが、主人の幼友達だといふ女の方から、主人へお手紙が参りました。その方は今、北海道にお住ひの方なのですが、お醫者様の奥様で、お子達もおありとの事でございますが、——私は、悪いとは存じましたが、秘かに開封して其のお手紙を讀んでしまつたのです。然し、私が或る種の恐怖を豫期したのに反して、非常に清純なクリスチャンとして、同信者の策勵が讀みとれましたが唯一つ私にとつて不解な言葉がありました。

『幼い頃の事がなつかしくてなりません。何時の日におめにかゝれるでせうか！お便りをいたゞいたら、私も亦お便り致します』つて書かれて居りました。其の夜、主人は私にボンと手紙を差出して、『讀んでみるよ』つてその手紙を見せてくれました。私は素不知顔で讀みました。そして、『貴方この方にお便りするの？』と問ひました。一寸詰問するかのやうでした。主人は『出さない。』と一言答へたきりで、ボンと其の場を立つて自分の部屋に入つてしまひました。それから一週間程して再び北海道からの手紙が参りましたので、私は主人が、私に『出さない』と言つた手紙を

内證で出した事を知りました。勿論其の手紙も秘かに讀みました。其の事が主人にわかり私はきついお叱りを受けました。でも、私は不安でなりません。私は一體どうすればよいのでせうか。」

「今夜お越し下さる時、御主人様は？」

「ええ、承知して居ります。『道を求める爲には槍が降つてもゆくべきだ。』と言つてくれまして、坊やをつれてお風呂に出かけました。」

「お話を承つて居りますと、不可解なのは御主人でなくて、むしろ貴女じやございませんでせうか。甚だ失禮を申しますが——。」

「有難う御座居ます。私は罪ふかき女でございます。私が眞に佛徒として覺行するならば、寧ろ一切を懺悔し、そこから出發せねばならぬ事に氣つかせていたゞきました。如何に異教徒と雖も、其の人の爲に、寧ろその信仰を助成する事が大切でした。主人の前に懺悔し、主人の信仰増上を念願し、而して私も安んじて念佛精進できる爲の協力を主人に懇願し、一日も早く主人を拜めるような妻になることが大切だったのでございます。『佛法

は、拜む事を教ふ』とか、合掌してお念佛させていたゞける私は、罪業深き凡夫、それでよかつたのです。」

と結んだ女性は、深い呼吸を一つ、そして「長しやべり致しました。どうぞお許し下さいませ。心のわだかまりが解けた嬉しさに、つい厚顔しく一切を告白させていたゞきました。」

「有難う御座居ました。この度不思議の御縁で北上させていたゞき、不束なお取次にも抱りませず御信仰の増上に役立たせていたゞきました事、當方より御禮を申し上げます。」

「いゝえ、恐縮致します。尊いお話を連日拜聴させていたゞいて居りますが、このように御趣旨を頂戴致して、誤つては居りませんでせうか？」

「結構でございます。特に『私は、罪業深重の凡夫、それでよかつた。』とお受けとり下さいましたのは、要中の要點でございます。

善人と悪人が相對するとき、凡夫は常に自らを善人の側におきますが、淨土教の祖師は常に自らを悪人の側におかれて居ります。極悪中の愚(傳教)・十惡の法然坊、愚痴の法然

坊(元祖)・愚禿(親鸞)等御承知の通りでございます。」

靜かに頷いて、腕時計を見た女性は、意外の長座を詫びて去つた。何時頃から降り出したのか、小雨が屋根を打つていた。

猫の穴掘り 寺田寅彦

猫が庭へ出て用を便しようとしてまづ前脚で土を引かき小さな穴を掘起こして、そこへしやがんで體の後端部をあてがふ。しかしうまく用を便ぜられないと、また少し進んで別のところへ第二の穴を掘つて更に第二の試みをする。それでもいけないと更に第三、第四と、結局目的を達するまでこの試みをつづけるのである。工合の悪いのが自分の體のせゐでなくて地面の不適當なせゐだと思ふらしい。

どこへ住居を定め或は就職しても何となく面白く行かないで、次から次へと轉宅、或は轉職する人のうちには、この猫のやうなものも或はあるかも知れない。

春光の陽ざしがさしこんで店内から一萬圓でも賣れる品物さ。」の空気をふつくらとふくらませてゐた。早くも一匹の蠅が何處からともなくやつて来て、往來に面するガラス戸で踊つてゐた。

時計の修繕に餘念のなかつた親父さんも、それが氣になつたのか顔を上げて蠅たゞきを手にした。

「小父さん、其の時計幾ら位なんでしょうか。」私は机の上に無難作に置かれた角型で五型位の小さな金色の時計を指さして訊ねた。一

見して女持ちの高級品だと云ふことは素人の私にも解つたが、親父さんとの會話の糸口を見出したかの様に私は口を切つてゐた。

「えーと、これはまあ九千圓と云ふ所だ。」まるで九千圓と云ふ高價な物とは關係のない様にボツリと親父さんは答えた。

「へえー、随分高いもんですね。」

「そうさ、舶來のバリバリ品だもの。それに金メッキのケースだ

のかつて出た親切は殆んど不必要なものであつたかもしれないが、私は其の時計を持つて、金満家で派手好きで自らの裝飾を誇ることに楽しみを感じてゐる知り合ひの婦人を訪れた。

親父は私をどう思つてゐて呉るか知らないが、髪のスツかり禿げ上つた、如何にもものん氣そうな此

の親父に、私が特別な好感を抱く様になつたのは親父の人柄のせいでもあつたらう。

「小父さん、此の時計一日二日

えびす顔

水野善朝

きがあるので、私は一先づ斷念し貸してみてくださいませんか。僕の

友人に買ひそうな人がありますから當つてみようと思ふんです。」

「へえ、そんな人を知つてゐるの？」

「いやどうもこれとはんだお手

笑ひ乍ら親父さんは色々注意を與へてくれた上で、快く私の提議を承諾してくれた。

時計屋の親父さんにとつては私

「やつぱし商賣と云ふものは、

お客さんの方に買ふ氣持が起つて來なければ賣れるもんぢやありませんよ。幾ら飯を食えと云つた所で満腹の者には食えないのと同じですよ。此の時計はいゝなあと思つて欲しくなれば少々高價でも無理して買ふのがお客さんの心理なんですからね。まあゆつくり其の時の來るのを待ちませうや。」

商賣も此の位のん氣に構へてやつて行けたら幸福である。親父さんは私から受け取つた時計をケースに納めた。

それから一週間餘り後、例の金時計が賣れてしまつたことを聞かされた。しかも、親父が私に示した價格よりも二千圓も高く賣られたとの事であつた。煙草をくわえた親父さんは、煙にえびす顔を曇らせながら、至極當り前のことの様に云つた。

「商賣は何でも同じだが、先づお膳立てをしてお客さんに欲しいと云ふ氣持を十分起こさせてからゆつくりと賣り捌くのが秘訣ですよ。」

そう云ふ親父さんの側のガラス戸に、今日は二匹の蠅が踊つてゐた。



よくわかる

中野 尅子

□「佛教は、わかりにくいものですネ」

○「いや、きわめて、わかりいゝものです」

□「だッて、キリスト教はわかりやすいが、佛教はわかりにくいでせう」

○「なぜですか」

□「キリスト教は、聖書を読んでもよくわかるし、お話を聞いてもやさしいが、佛教はお経を読んでも、むつかしいし、お話を聞いても仲々わからぬ。もつと佛教をやさしく、よくわかるようにして下さるといゝのですがネ」

○「アナタは、文字の佛教、話の佛法を云つて居られる。『佛法』そのモノは天地が佛法だから、わかりにくい、わかりやすいの問題でなくて、既に『佛法』の中に棲息してゐるのですよ、猫も杓子も、此のコーヒー皿も、カーネーションも松の樹も、太陽も、皆、佛法の中に生存している、本が讀めても讀めぬでも、お話が聴聞出来ても、出来ぬでも、至極安穩に佛法の中に育つて居る、犬の糞でも、蜜柑の皮でも佛法の中に輝いている。彼等は佛教が

六つかしいともやさしいともいわずに、幾十億年來、佛教の中に養はれて來ておるぢやないですか。だから、やさしいとかむつかしいとかいわれるアナタの意味の方が却つてわからぬのですよ」

□「いや、お経がわからぬのです」

○「お経は、そのコトをよくわかるように懇切丁寧に、よくわかるように書かれて居るのです。お経の文字を見る前にお経の『意味』をよく知つたら、お経の字は一字一句、皆よくわかり、有難い文字ばかりです。それをお経の『意味』や『味』のわからぬ坊さんや、學者が、文字ばかりをヒネクツたり、讀んでいるから、それでわからぬことにしているのです。わかつたつもりでいる人が、實はわかつておらぬから、それで佛教はわからぬものだとごさるが、私には極めてわかりやすいもので、よくわかつて居ります。アナタにだけわかつておらぬのでせう……」

□「エ、わかりませぬ。アナタの話はよくわかるようだが、煙に巻かれたようでドコかまだわかりませぬ」

○「アナタは文字の宗教や、説明の佛教に慣れて居て、『佛法』そ

のモノにふれておられぬから、私の話がわからぬのです。『お經』とは豎糸の如く萬古を貫く眞理、いや永遠から永遠へ續いて現に現われている、その現象界の總てが、眞實界の現われ、いや、眞如そのモノ、眞理そのモノでないものは一つも無いから、此の眞實相が「お經」です。美味い物は美味いがまゝで佛法、まずい物はまずいがまゝでコレも結構。赤い花は赤いから美しい、黒い鴉カラスは黒いから面白い、いづれも活き活きとした生ける『大佛法』でその儘眞善美の極上を現わしている。そして日々夜々に三千年昔から、いや億々年の昔から『眞實』をやつてゐるのです。アナタも私も、その一如の如來した佛として既にやつてゐるのだから、わかるも判らぬも無い、コレは判らんならぬことです。アナタが尋ねかけて來られたコトが、佛法の動き、そして對座して話してゐることが、又靈鷲山の會座を今現にココでやつてゐるのです。釋尊説法の會座が三千年昔に印度で有つたように、同じ佛法の力、法の現はれで、今、此の大法座がココで二人の間に開かれてゐるのです。私がお釋迦さまでアナタが舍利弗。アナタが釋尊で私が舍利弗、まあソレ位に違ひないのですよ」

□「そう云う風に佛教を下げて話されるからます／＼わからぬのですよ。佛教を安賣りして、わかつたように話されるから、皆が、わかつたような顔をして、皆、わからぬのです」

○「それぢや佛教は釋尊一人だけにわかつて、他の人には絶対に體

驗出來ぬものでせうか、三千年昔にだけあつて、現今には末法であつて正法は無いものでせうか」

□「そんなむづかしい事はわからぬが、佛教はそんなにやさしいもので無いと思つております」

○「むづかしいとは、タバコの味でさへ、吸はぬ者には絶対にわからぬ、むづかしいのですよ、アナタがどんなに言葉を盡して私にタバコのうまさの説明して下さつたり、文字に書いて百萬言を費しても、一度も喫つたことの無いものには、結局、馬の耳に風です。話でわからせる事の出來ぬ困難さに於ては、佛教ばかりでなく、タバコの味でも、結婚の味でも、腹のふくれた味でも、屁を放つた後の氣持のよさでもわからぬ。判つた者には判つた事で六つかしいものでは無く、現に赤ちゃんは、母乳の性分分晰表は知らずとも、おひし／＼で飲み、育つてゐるぢやないですか。お乳の味を説明せなくても、お經に書かなくても、今も昔も變らず行われ、變らず世の中を動かしている。だから結局、わからぬ人にはむづかしいのだし、わかつて仕舞へば易い、味つておらればわからぬのだし、味つておれば百人の空腹者の中におつても、自分一人だけは満腹者で眞實で有り得るのです。

釋尊が、百匹の鼻の缺けた猿の中におつても自分一人だけが鼻が有れば、鼻のある自分の方が正しいのだ、百匹の猿から嗤はれても、笑つてゐるものゝ方が間違つてゐるのだと云はれた。その

一匹の猿の心持が判つたら、眞理は明瞭なものです。

佛法はそこまでわからねばいかぬ、それで法然上人も、『たゞ一向に念佛すべし、……申す外には別の仔細候はず』と仰せられた。『申す』とは自分の内からこみ上げて来るコノ大生命の動きです。コレだコレが本當に自分を活かし、一切を活かす、生命の素だ、活動の根源だ、此の力で動き、此の心で見えて突進すれば、決して間違ひはないのだ、コレは單なる自分の意志だナと云う小さなものでなく、自己の本心であつて、自己の本心は宇宙に連なり、大宇宙、大自然の大生命力が吾れに通ひ、我れを今動かして來たのだ、コレを目覺めと云うので、佛心の自覺と云うのだ、如來他力の選擇本願力だと仰せられたのは、今現に私の上に現はれて來ている、此の電氣の如き活動力である、創造力である、とハツキリ感じます。

此のハタラキに基いて生活してこそ眞實で、それ以外の考へや力で動いたのでは、名聞（みやうもん）であり、利養（りやう）であり、煩惱（ぼんごう）であります。同じ念佛でも、コノ「お念佛」が念佛させている念佛は「他力」で、それ以外の形式で申してゐる念佛は「自力」である。聲まで違ひ、働きが違ひ。

だから眞實念佛に非ざるものは皆虚假（こけ）なりと斷ぜられたのは當然です——コノ尊いお念佛が誰の中からも飛び出し、誰一人をも遠慮なく救つて行つて下さるのだから、一つ心、からお念佛にナ

ッて見て下さい、するとよくわかるものです。私の説明以上よくわかる……」

蝦夷地念佛

みんな人ごとに 須藤隆仙

去年の十月、佛大惠谷教授の淨土宗高僧の蝦夷教化なる一文が淨土に掲載され、尊く讀んだのであるが、今は善光寺第七世仙海上人が嘉永六年再鑄したものを基として惠谷教授の掲げられなかつた部分の歌を此處に誌す。

今よりは、みな人ごとにひびひびに

わすれず申せ、なむあみだぶを

阿彌陀佛と、常にとなふる人はみな

世のさいわいは、めぐる也けり

阿彌陀佛ねがふ心をみそなはせ

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

この子引歌は有珠善光寺三世辨瑞上人の作と云われ、東蝦夷日誌には

「若者には子引歌といへるを作り是を夷語もて教へ自ら鉦打鳴し無踊等し、また梓にのせ和人共にも施し給ひ云云」

とある。おそらくは節をつけリズムにのせて、アイヌも和人も

念佛の中に身も心も没入して法悦に浸つた事であらう。

元來アイヌは異宗教を忌み嫌ひ、松前藩は、夷族の攻撃を防

ぐ爲、寺院やお墓を藩府の周圍に澤山建立したと云はれる程で

あるが、其の夷人に念佛の教を廣めるには困難の多かつた事も

此の歌について思ひやられるのである。

しかし「ねがふ心をみそなはせ」の願ひはおそらく今でも僅

に残るアイヌ族の胸に變らぬ希望なのではなからうか。有珠善

光寺には現在でもアイヌの參詣が多いそうである。

アメリカ二世の信仰



白井憲成

以下の記述に見られるような問題は、卑近でありふれたものかも知れない。しかしアメリカと云ふ地では、このやうな問題も、更に複雑な要素を含んでいゝるやうに思はれるので、敢えて記述して見た譯である。

成日、信者の一老人が、お寺に參つて來た。『お墓をたてたから、開眼して欲しい』これが用件なのである。

日本のやうに、寺の境内には、お墓はない。随分離れた所なのだから、電車で行くか自動車か、とにかく歩いては行けない。それでその老人は迎えに來た譯なのである。一應の具足を取揃えて、その老人と外に出る。『あのフォードですよ』と指さされた方を見ると道路の側にびつしりならんだ自動車の列の中に、立派なフォードの新車がある。『ニューですね』などと話し乍ら、私は、この老人が自分で運轉して來たものだと思つてその車の所まで來た。自動車でどんな所へでも用足しに行くアメリカの事だから、不審な事でも何でもない。

車の中には、二十四・五位の男女が、ラジオを聞き乍ら煙草をふかして居る。『息子夫婦ですよ』と言はれて、お互に一應の挨拶だけ

を交はす。息子がドライブして來たのである。別にさしあたつて話しかける事もない。たゞ息子はだまつてドライブを續けてお墓につく。

刈り込まれた芝生の中に、研きたての墓石が、やはり日本風にたてられている。水をかけたり、花束を供えたりして、型通りの讀經に移る。その老人はうしろに立つて、一生懸命に念佛を唱えている。所がその息子夫婦は餘程珍らしそうに、あちらから、こちらからと寫眞をバチ／＼撮り始める。彼等が寫眞と打ち興じている間に、讀經は済んでしまふ。彼等夫婦は、寫眞を撮り終るとさつさと自動車の方へ行つてしまつた。私は並べた具足を取りまとめて、その老人と車にもどつて來ると彼等夫婦は、前と同じやうに、ラジオのジャズをきゝ乍ら煙草をふかしている。二人が乗り終ると、又だまつて、もと來た道をドライブして寺に歸つて來る。老人は『寺で法要をつとめて呉れ』と言ふのでさつそく車から降りる。老人も降りる。所が私と老人が降り終ると息子夫婦は、そのまゝその自動車で、何處かへ行つてしまつたのである。

私は、てつきり息子夫婦も、自分のお母さんの法要だから、參詣するものと思つてい

た。所が法要に參詣するのは、その一老人だけだつたのである。

『息子たちは息子たちで、映畫かダンスに行くのですよ』と、これはその老人が、『何故一緒に息子夫婦も參らないのですか』と云ふ私の問ひに對する、さみしい答なのであつた。

私はこの親子の間に何か不自然なものを感じずには居れなかつた。したがつて型通りの法要に引き續く説教も、その内容は、自ずから人間の愛情の問題に重點をおかなければならなかつた事は至極當然である。

所で、私はこゝで自分流の愛情談義をしようとするのではない。と云ふのは、私はこの親子の中に更に深く問ひたゞして見なければならぬ事がある様な氣がしたからである。そこで私は、これを機會に前後數回この家庭を訪ひ、そこにひそむ色々な問題を、その老人と共に考へる事が出来たのである。

これを敢えて記述しようとした理由も、これが案外一老人だけの問題ではなさそうだからである。

私は、このさしみそふな老人に向つて、高い壇上から、偉そうに説教する氣には、どうしてなれなかつた。たとへ法衣を身にまといて居るとしても、又たとへ若干の經典を捧讀

み出来ても、眞に苦しみを知らない者は、道なぞを人に説き得るものではない。先ずその苦しみを聞くことが、その苦しみを知る事にもなるのであると思ふ。

この老人の家庭には、何かあるに違ひないあの老人のさみしさの裏には、何か大きな問題があるに違ひないと、その日の印象が遠のかない或日、私はその老人の家庭を訪ふて見た。

私が訪れたこの老人の家は、ニユースタイルの立派な邸宅であつた。前庭のローン、ガレジ等近所の白人の家庭に何等ひけ目をとらない堂々たるものである。家屋内の設備にしても、又、整えられた家具類にしても、何一つ不自然さを感じさせない程立派なものであつた。

需めに應じて出て來た老人は、やはりこの前と同じやうに淋しそふである。そうしてその老人は、何處となくこの立派な家に不似合な印象を私に與えずにはおかなかつた。それは丁度田舎者が立派な應接間に通されたやうな、不つり合ひさなのであつた。一見した所満ち足りたやうに思はれるこの家庭の中に、どうしたのだらうと、私はその老人との話の中で、何とかしてポイントを掴もうと努力

した。

老人は私の來訪を心から喜んだのだらう。話は、この老人の青年時代から今日に到る迄の長い經歷を以て始まつた。ながいアメリカに於ける殖民地生活の苦闘については、邦人一世は、あまり多くを語らないのが普通である。それには色々理由はある。所がこの老人は、轉々とした自分の經歷を極めて詳細に話すのであつた。それは『人生の浮沈』と云ふ一語につきるかも知れない。しかしそう云つてしまへば、苦しかつた時代も又楽しい想ひ出におきかえる事も出来るのである。

時折、邦人から、色々と苦しかつた時の想ひ出話を聞いた事もあつた。が、その想ひ出も結局、今では成人しきつた息子を前にして、楽しい想ひ出となつてしまふのが普通である。この息子の成人ぶりが、自分の長い苦しい努力の結果だと思へば、自分のかつての苦しみも、これから伸びて行く息子への楽しい期待におきかえられてしまふのである。老人の老いさき短い淋しさも、この希望に依つて打ち消されてしまふのである。これは、もつとも自然な親子の愛情のつながりかも知れない。

所が、この老人からは、そのやうな意味で

彌勒像

町田 トシコ

おお、これはこれ、お慕わしの菩薩様
右のおみ足を左のお膝にお載せになり
よくもまあ、あなたは

おびたゞしい世界の瓦礫のまん中で
生きていらつしやる

鐵と鉛と、彈丸と、あゝそれから
土の中から人間が掘出す鑛物の數々で
今、地球は乾ききつておりますのに

よくもまあ、あなたは

右のお膝に右の肱をついて

その、生死を超えた五本のお指の深い哲學は
何故こう迄に、もう、悶絶しそうな衝撃です

おお、これはこれ、おなつかしい菩薩様、

私を待つていて下されたのですね、そのお微笑は

五十六億七千萬年彼方への距離を

あなたの御出馬迄の自信に満ちたそのポーズ

えゝ、私は失いませんと

永遠の理想と希望を失いませんと

世界の中の瓦礫が美しい緑の原となり

紅の一點を咲かすまでは――。

のほこらしげな想い出話を聞く事は出来なかつた。この老人は『自分の息子には、普通の人に見るやうな親子の愛情を見る事は出来ません。』と云ふのである。

『子供を養育する爲に先ずキリスト教の保育園にあづけた事も、不自由な中からでも、ハイスクールから大學までも入れてやつた事もその當時の自分としては、最善の方法でもあつたし、又盡し得る充分な努力だつた』と老人は言ふ。そして今では立派な仕事を持ち、成人した息子に一種の誇りを持ち乍ら、『何だかよそ／＼しい不満冷たさが感ぜられる』と云ふのである。たと

へば、『この間の法要のやうに、自分の親の法要であり乍ら、一緒に参詣しようなどとは、少しも考へて呉れない』とか『お墓でだつてあのさまですよ』と言葉を續ける老人は、最後に、『一體私が死んだら、息子はどうして呉れるんか、と、それが心配で夜も寝られないのですよ、』と話を結んでしまつたのであつた。

この最後の言葉は、年老いた親の誰もが持つてゐる、息子への最後の唯一つの願いかも知れない。

『時は金だ』と云ふ言葉は、アメリカでは、もつとみじかに感ぜられる。だからこの老人も、働きざかりの壯年時代には、この足手まといの子供の爲に、勞働もさまたげられたに相違あるまい。費用も少く、設備もよく、大事にあづかつて呉れる保育園は、『當時どんなに感謝したか知れませんか。安心して夫婦とも稼ぎが出来たのですからね』と、開拓初期の子供養育の苦しみを端的に語るのである。しかし『これが間違のもとだつた』とこの老人は簡単に割り切つてしまおうとする。要するに、子供がキリスト教となつた事が、家庭的な淋しさの原因だと見ようとする。

成程子供を教會に托すれば、子供が教會に

近づき、キリスト教徒となる事も當然である。しかしこゝはアメリカなのである。たとへ信仰の自由をもとめて集つた人たちが築いた國とはいへ、深く根ざしているものは、キリスト教的傳統なのである。學校も社會も全てが、この傳統の上に形作られている譯である。だからたとへ息子がキリスト教徒でないからと言つて、すぐさま、息子が自分と同じやうに、佛教的信仰をもち、又佛教的な雰圍氣を理解しているなどとは斷定出来ないのであるし、又逆にいつて、子供がキリスト教徒になつたからと言つて、親子離反の原因だとは言ひ得ないのである。

要するに信仰の問題と愛情の問題とは、一應別の領域を占めなければならぬと思はれるのである。

したがつてこの老人の家庭の淋しさも、更に色々な要素から考へて見る必要がある。勿論、信仰の相違が占める要素は多い。しかしその前に多くの事が考へられねばならないと思ふ。

先ず指摘したい事は、『世界のちがひ』と云ふ事である。

たとへば老人は話の中で『お父さんは英語もわからず、ダンスも出来ないから家に居ら

れると邪魔だ。日本人町へ映畫でも見に行つて來なさいよ』と息子からすこしばかりの小遣いを貰つて、しよぼ／＼と日本映畫を見に行く事が多いと言ふ。日本人町と言ふ特殊な地域も、このやうな人たちの集り場所には、ふさわしいかも知れない。舊い日本映畫も、こゝういふ老人たちにとつては唯一の慰安物でもあるし、又、日本内地からどん／＼とやつて來る浪曲師や流行歌手も、これらの人々の異郷の淋しさをまぎらわす爲には、この上もない慰安なのかも知れない。

息子たちはどうかといへば、親爺の居らぬ間にと、盛んにバーティををし、ダンスに打ち興じ、映畫にも出かけて行つてしまふ。しばらく日本映畫を楽しんで來た老人が家へ歸れば、息子たちは出かけて行つてしまつて、家には居らない。切角のたのしさも、家に歸れば、更に深い孤獨の淋しさにおきかえられてしまふのである。要するに老人は、だんだん息子たちの世界から餘けいた者となつていつてしまふのである。年をとることゝ、經濟的能力がなくなる事が、更にこれに拍車をかける譯である。

しかし、こんな現象は日本にだつていくら

でもあり得ると言ひ得よう。所謂ゼネレーションの相違と言ふ言葉は、年寄りと若いものとの世界の相違を意味しているのである。年令、趣味、考へ方の相違は、この二つの世界をだん／＼と切り離していつてしまふのである。

所が、アメリカに於いては、このやうな老人と息子の間では、これらの現象はとくにめだつて甚だしい。

先ず言語の相違が、それであらう。

たとへ親の云ふ日本語は理解出來ても、彼等は英語の世界に生きている譯である。これが二つの世界を切り離してしまふ第一の原因であらう。趣味、娛樂、したがつて考へ方さへも異つてしまふ。閉された一世の社會に對して、息子たちは開かれたアメリカ社會を持つていのである。傳統的、保守的傾向のつおい一世老人たちが、最後には孤獨な淋しさに追いこまれて行く事は當然である。

所がこれよりも更に本質的なものがある。それは親子の愛情に對する考へ方の相違である。(つゞく)

涙

早見君子

私はかつて長泣きをした経験をもたない、けれども涙といふものは美しいものだと思ふ文字からうける感じも好ましい。人生の生死に流す涙も亦悲しい美しさだが、涙の種類にもいろ／＼ある、感激の涙、嬉しい涙、楽しい涙、甘い涙といふ様に。然し私の云ふのは、やゝ藝術的な涙である。

詩的な意味を含むデリケートな涙、流さうとしない。云はゞ不用意な思ひがけない感情からわく甘露の如きもので、實に美しい好ましい涙だと思ふ。

悲しみの涙でさへ、私は美しいものだと思ふ。まして眞の藝術的に觸れた感激の涙をやである。『よく泣きよく笑ひ得る者は善人である』と誰やらが云つた、本當にさうだと思

ふ。私の知人に長谷川安兵衛といふ商學博士があつた、この人と、經濟學者の小汀利得氏とよく芝居見物を御一所した。このお二人はインテリ男のなかの最たる存在でありながら、私共が泣けない場面でもハンケチ急がしく出し入れしてゐる、男のくせに可笑しいと思ふ人は思へ、私は實に尊といふ美しい涙だといつも思つてゐる、小汀氏は健在で公職につかれいかめしい身柄でその辛辣な毒舌は人も知るところでありながら、至つて思ひやりの深い善人で、有名な愛妻家である、長谷川博士は公用を帯びた南洋旅行の歸途飛行機事故で惜しくも不慮の死をとげられた、勿論この上もない善人であつた。

随分大昔の話ではあるが、戦前何年頃か、佛蘭西の舞踊家のサカロフ夫妻が東劇へ來たとき『ゴヤの繪に依れる』と云ふ舞踊を見た幕が開いてピロードの黒いバックに、ゴヤの繪そつくりのサカロフ夫妻が出て來た時の瞬間、何といふ事はなしにジーンとひとりでに涙が出て來た、そして思ひがけない自分の涙に驚いた。

又露西亞のシャリヤピンのボルガの舟歌を。聞いたときにも同じやうな涙が滲んで來た事を今も忘れない。

最近では鎌倉鶴ヶ岡八幡の七百六十年祭の時に、京都から裏千家の家元が見えて舞殿で献茶の式を目近に見た時、日本の儀式の莊嚴さと家元の水ももらさぬお手前とに打たれて涙が流れた。何といふ心持のいゝ涙の甘味か、涙の喜び、涙の歡喜を覺え、涙の讚美を禁じ得ないものがある。

こゝろいふ涙は誰しも生涯のうちに幾度か味はう涙の味だと思ふ。

こんな涙を佛法では何といふか折りを得て識りたいと思ふ。

短歌ではいろ／＼な涙の種類を纏綴と綴つてゐるが、俳句にはあまりない、その少ないなかから見つけた句を二句、それに自分の下手なのを添へて、少々キザッぽいこの文を終りとする。

不思議やな汝れが踊れば吾が泣く、虚子
秋風やうれしきことに涙ぐみ、立子
さよならと涙ぐみくれあたゝかく、君子

大島先生遷化に際し御遺族より本誌に金一封御寄贈下さいました。ここに記して御禮にかえます。(編集部)



老陶工を思ふ

吉田 絃二郎

薩摩に波の平といふところがある。昔は刀工で名を知られた郷である。鹿兒島から西に數里、靜かな海をへだて、美しい櫻島と相對してゐる景勝の地である。

こゝの海岸の松山の中に陶窯を築いて名工長太郎翁が住んでゐた。わたくしがはじめて長太郎翁を訪ねたのは翁がすでに古稀の齡を越へてゐたところであつた。

長太郎翁が半生の苦心の結果近代薩摩焼に大革命を起したことは知る人もあるであらうが、翁についてわたくしは面白い逸話を聞いた。

波の平の翁の窯場と川一つへだて、島津家の別荘がある。東京から鹿兒島に歸られた島津公は折々その別荘から、舟に乗つて川を横切り、長太郎翁の窯場を訪ねられた。

その時長太郎翁は羽織袴で公を迎へるのであるが、水邊の砂の上に土下坐して待つのであつた。

しかし翁は子息たちに向つてかう語つた。

「お前たちは立つたまゝお迎へするがいゝ。だが、わしの場合がちがふ。わしは子供のころから殿様の前には土下坐したものだ。ぢやから世の中が變つたといつても、わしの一生だけは昔の通りにする」

このころの若い人たちや、または時代思想の流行に遅れまいとする人たちにとつては度しがたき人間のやうにも思はれるであらうが、わたくしは、今の世にも長太郎翁のやうな陶工が一人や二人はあつてもいいではないかと思ふ。

長太郎翁の作品は一見眞つ黒な鐵の塊を堅めたやうな、或ひは熔岩のやうな男性的な力の凝結を感じさせるが、その一面に春の水のあたゝか味をたゞよはせてゐる。時流に媚びず、滅びゆくものに對するあはれみの情を捨て得なかつた名陶工のこゝろの香が、かれの

作品にかくされた深いものを感じさせるのであらう。

このごろは雑誌や新聞を見ても、また一部の若い人たちの言葉を聞いてゐても、極端に敬語を排斥してゐる傾向がある。しかしその結果はわたくしたちの社會生活から、人を敬し、人と和し、人を愛するといふ溫かな感情を失はせることになる。

かつて戸山學校の校庭で、坪内逍遙博士の指導で、野外劇を演じたことがあつた。その前日、坪内博士は會場の下檢分に出かけて行つた。すると婦人席と書かれた建札に氣付いた。博士は會場係りの一教授を呼んで「婦人席はいけませんよ。御婦人席でなくちや」と言ひ、建札は御婦人席と書き改められた。

日本の戰記物を讀むと、昔の人は戰場で敵を斬るにも「御首を賜はらん」といつてゐる。

人を敬し、敵をも敬する日本民族の心のゆかしさを失ひたくないと思ふ。

美しい言葉を使ひ、ゆたかな言葉を使ふことによつて、先づわたくしたち自身の魂が淨化されることを知らなければならぬ。

今の世にもつとも恐ろしいことは人間を見るに、味方か然らずんば敵といふ風に分けてしまふことである。人類には敵はない。すべて一様に神の子であり、佛の子である。人類を差別してかゝるところから敵が生まれ、味方が生まれ、憎惡が生まれ、戦ひが生まれる。

ワルデンの森の哲學者ソーローは大學生時代からエマースンに私淑してゐた。かれは森の小屋に住み、一週間の内たゞ一日だけ鉛筆削りの勞働をして一ドル二十セントの賃銀を稼ぎ、それで一週間の生活費をまかなひ、残りの六日は思索と讀書のために使つた。

ソーローは生涯エマースンを尊敬したがその生活上の主義に於いては必ずしも一致しなかつた。或る時ソーローは社會主義者仲間の運動に参加したために警察に拉致された。

エマースンは氣の毒に思つて警察にソーローを見舞つた。ソーローは鐵の格子の中にうづくまつてゐた。エマースンはつくづくとソーローをながめて

「君は何故鐵格子の内にはひるやうなことをしたのだ？」と、半ばソローを責めるやうな口調で言つた。

するとソローは冷靜な態度で「先生は何故鐵格子の外に居られるのですか？」と反問した。

社會主義的な思想の持主であつたソローと高踏的な哲學思想の持主であつたエマーソンとは思想的には二つの世界に住んでゐた。一は鐵格子の内に、一は鐵格子の外に。

しかもこの二人の哲人たちの終生は尊敬と親愛の裡に世にも美しい師弟愛と友情に依つて結ばれた。

わたくしは今日も武藏野の片隅を歩いた。

雨上がりの耕作地の黒い土のなかゝら縄紋式の土器の破片が轉げ出してゐた。わたくしは四センチ平方の破片を手にして眺めてゐる間に、その破片に絲を巻くために作られた人爲的な直線の溝の跡を發見した。それは二千年或ひは三千年前にそこに住んでゐた人たちが漁るために使つた漁具の一部分だつたのである。

わたくしの眼には、土器の破片を石斧で削り、釣り

絲を結びつけてゐる若者の姿が泛かんで來た。二千年三千年前にそこに住んでゐた人たちの生活は決して、現代の生活に比べて不幸なものではなかつた。かれ等は武藏野の鹿のごとく自由な奔放な生活を、平和な生活を樂しむことができたであらう。

しかしかれ等はまだ釋尊の出世を知らないまゝに死んで行つた。

かれらは諸行無常の悲しみと御佛の大慈悲とを知らないまゝに死んで行つた。

わたくしは武藏野の散歩から歸つて來た。

わたくしは書齋の机の上に、土器の破片を置いた。机の上には牛乳を盛られた白磁のコップが置かれてあつた。

わたくしは雪白の牛乳に見入つてゐる間に、尼連禪河のほとりに賤しき女のさゝげた牛乳を召し上がられた釋尊を思ひ合掌したい氣持ちになつた。

芝園だより

◎本號を編集して感あり。自らに惜まず、他に惜しまるる者たるべからずと。中村先生を始め藤田氏追懷の胸暖まる玉稿を得、編むにいささかの稚拙はあれど、故人遺族共に了せられんことを。

◎淨土宗の元老、大島泰信先生逝く。導師の椎尾大僧正の聲も、心なしふるえ、その惜別の情の溢れるのが感ぜられた。

◎先生の遺徳はその葬儀の盛大に反映し、椎尾、大村、眞野、大野その他宗門、學界の巨星が堂に満ちた。

◎近々に本誌が飛躍的に發展する瑞兆あり。ふところに暖めておいて、少ししたのしんでから御披露したい。しばらく御待ち下さい。

◎久里濱雜記の佐々木孝丸先生、先日来、JOKRの釋尊傳で活躍餘勢を本誌のためにさかれる日の

近いことを、皆様と共に期待する。

◎宗門のことは分らぬが、大淨土宗を一足先に地で行つてゐる本誌としても、矢張り二つに分れて讀まれるよりは一つになつて讀んで貰つた方が嬉しいのだが。此點でお役に立てばとも考へてゐる。

◎薫風に男子の誇りがへんぽんとひるがえる五月の空に、生けるものすべてが大きく伸びる時、明治創業以來營々といとなまれて來た橋善氏の苦心談を送る。此種の讀物なるべくつゞけたいのですが隠れた材料を提供されんことを。

(竹中)

◎吉田絃二郎先生の隨筆集「生命の河」が、先月、創元文庫の一として出版された。激しく生命の本源に遡り行く詩人の熱情が溢れてゐる。一讀をおすすめする。(A)

六・一七二頁・八〇圓)

◎先號に豫報した「法然上人」は其後審重考慮の結果中止とし、吉

田先生作「京の時雨」——耳四郎を

テーマとせる——を來月號から連載する豫定に付き、御期待を乞う。

◎且、來月號より三重大學助教授西川知雄氏よりの創作法然を連載する。誠實と野心に満ちた作品。

◎本期追悼號の事を聞かれた吉田先生から追悼の句を送られてきた

◎鎌倉大佛七百年祭は、同市佛都衆の中心として、四月八日、盛大に舉行された。奉納舞踊、花祭等もありして、當日の人出萬を數へた。引つづき秋まで種々の行事がある。

◎本會の向側には中央勞働會館があり、連日のように勞組の集り、中勞委の會合が持たれ、又増上寺の山の裏は勞組デモの集結地となつてゐる。四月十二日は丁度山内にある宗務所で峰島氏の敎學院研究會が靜かに開かれてゐる窓の外を花吹雪をつき陸續としてデモがやつてきて、興奮したアジ演説が始まつた。

◎ガンジの意成つて獨立したインド、光榮ある獨立のために國費半額を軍備へ、翁苦笑せん。(龍海)

維持會員規定

- 一、會費五百圓(二年)
- 二、會員誌上發表
- 三、本會刊行物贈呈

誌代

會費半々年二百圓、一年四百圓(下共)每號定價三十圓下四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿七年四月廿五日印刷
昭和廿七年五月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼
發行人 眞野 正 順

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
電・芝(四三)一三二八
會員番號B一〇八〇一四

別製天ぶら

御集會に
御法事に

新橋

橋

善

橋本善吉

新橋電停前
電話銀座(57)二七〇〇
六七〇〇

本會代理
責任取次

F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社
東京都港區
芝田村町三ノ七

.....スライド映寫機(幻燈機).....

◎ミナシキ58型B ¥12,880.送料¥500. ◎マスターS50. B型 ¥11,880. ¥500.

.....スライド(フィルム).....

- | | |
|---|--------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語 | ¥ 460 |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗 | ¥ 430 |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く | 各¥ 430 |
| ◎白像の村—戦火に追はれ砂漠をさまよう人々を救う白像 | ¥ 460 |
| ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生 | ¥ 460 |
| ◎アルプスの娘—ヨハンナスビリ作、汚れしらぬ娘ハイジのもの
のがたり二巻 | 各¥ 430 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化 | 各¥ 430 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話 | ¥ 430 |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける | ¥ 460 |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまの苦勞が幸せになる | ¥ 430 |

其他—作品300種、在庫豊富、目錄進呈致します。